

桂 小米朝 師匠 らくごべらを語る

呼吸と間

桂 小米朝 (かつら こいちょう)
昭和33年生まれ。昭和53年8月、父である桂米朝に入門。平成4年、大阪府民劇場賞奨励賞受賞。平成17年、兵庫県芸術奨励賞受賞。



「らくごべら」浜松公演、楽しみにしています。

■アクトシティ浜松には四面舞台がありますよね。出来た時から注目していました。駅前であって、地の利もいいですね。藤山直美さんの舞台公演や、去年は林家正蔵襲名披露でも舞台に立たせていただくなど、何度か大ホールにはおうかがいしました。

今回は中ホールでの公演。初めてです。いい空気が流せそうだなと楽しみにしております。

■本誌の「ピバーチェ」はイタリア語ですよね。『元気な』という意味ですけど、モーツァルトもイタリアが好きでした。若いときにしょっちゅうイタリアを旅行していたからこそモーツァルトのあの音が生まれたのだと思います。そんな、国を越え、時代を超えたモーツァルトのメッセージを伝える役は私が最も合っているのではないかと自負しています、なんといっても私はモーツァルトの生まれ変わりですから(笑)。

いつ頃から「モーツァルト」を意識されたんですか？

■きっかけは高校2年の時ザルツブルクのモーツァルトの生家に行って、ハンマークラブ(ピアノの前身)を見たら懐かしいなと思ってしまった(笑)。理屈じゃないんですよ。モーツァルトの過ごした街の雰囲気が好きになってしまった。初めて行ったのに…懐かしさを感じてしまったんですよ。ノ

■そこで一つ、モーツァルトと自分をオーバーラップさせようと思ひまして。所詮唄家だから広く浅くしかできないけれども、それでも何かモーツァルトと私を結ぶものを見つけないと手につけられない。

■モーツァルトは、ロココの時代に生きた人。紳士・淑女・貴族の時代、華やかな時代のゆったりとした優雅な雰囲気がすごく好き。

私といえば宝塚歌劇が好きとか、父がモーツァルトと同じように偉大だったりとか。こうして重なっていくのです。

■彼の音楽は陰りのない音楽。澄んだ音楽。これは並の人間が努力してもできるものじゃない。ベートーヴェンは人間の喜怒哀楽が表現されていて、まだ努力すれば近づけるような気がするんです。でもモーツァルトはどう頑張っても近づけない。じゃあ、もう生まれ変わりで行こうと思うことにしました。かなり強引かな(笑)。ノ

■今はスピリチュアルな時代。美輪明宏さんや江原啓之さんなど見えない世界を語るものに関心が集まっていますよね。20世紀だったらオカルトと括られてたものですよ。でも今はどんどんそれが表に出てきてますよね。

そうなんだと思うことによって成し得るんです。たとえば1ヶ月後に控えたコンサート。「ああいいな。いい演奏ができたな。お客さんよかったな。」自分で祝福し、人に感謝するんですよ、1ヶ月前から。すると本当にそうなるんです。新庄選手が「いいホームランを打つよ!」と言って、そのイメージを抱いて本当にホームランを打つ。今までできなかったことも発想をちょっと変えることによって、現実になるような気がします。

■21世紀になって、物質文明、そして経済がはやめちゃになってしまった。いろんなところで借金も背負わされているけども、それはそれとして、もっと精神的に豊かになるよ、それが文化じゃないかな。

楽しい舞台になりそうですね。

■私は言葉を生業としている人間ですから、言葉の力でお客さんに異次元の空間を創ります。「私がモーツァルト、250年ぶりに地上界へ降りてきました。」という気持ちで浜松では演じます。魂のノ

世界とか見えない世界のことを見える人が発言するような時代になって、舞台芸術にも何かが乗り移ってくるような気がする。それをみんなが求めているようなところもある。モーツァルトのことをみんなが愛したら、モーツァルトが本当に降りてくるような気がする。

■落語家は扇子1本持って座布団の上に座るだけなんです、いろんな人間になります。この落語の力とモーツァルトの神のような音楽がオーバーラップしたら、時代を超えて国を越えて大きな音楽をみんなで享受できるよ、ノ



になるんじゃないかな？

そして落語は笑いの芸だから、みなさん笑いながら楽しんでください。難しい顔してクラシック音楽を聴くのではなく、笑って笑って気の抜けたところで、素敵な音楽を聴いたらもっといい空気が吸えますよ。

落語とコンサートの両方が楽しめそうですね。

■落語といえば落語。コンサートといえばコンサート。集会といえば集会(笑)。まあ、どんな形であれ、私は「呼吸と間」を大切にしています。お客様も我々も呼吸する。その呼吸の波長が合ったときにいい空間が創れる。これは落語であってもコンサートであっても講演会であっても同じ。

呼吸が合えば、皆が一つの輪になれる。お客様もその輪の中に入っていただく。今回のらくごべらでも伯爵の役を誰かにやっていただきます。さてどなたが伯爵の役になりますか、お楽しみに。ノ

■私がこの手の分野に着手したのはコンサートの司会をやるようになってからです。演奏曲をただ紹介しているだけでは面白くない。唄家は笑いを入れながら舞台と客席をつなぐパイプ役。お客さんは本当に楽しんでいるのか？感動しているのか？「お客さん感動しましょうよ。」このパイプ役ができたかと思ひながら、

賛同するアーティストと、お客さんとひとつになれるようなメニューを創ってきたんです。

ジャズでやったこともあります。主にはクラシックですね。オーケストラだったり、ピアノ1人が相手だったり、弦楽カルテットだったり。三味線が相手というときもありました。

米朝師匠への入門は、大変な決意が必要だったような気がします、何が背中を押したのでしょうか？

■好きだけではできない仕事とはよくわかってたし、落語は歌舞伎と違って御曹司だからできるわけでもない。でもやっぱり使命感かな。長男であったし。男3兄弟だったんですけど、「1人ぐらい唄家になってもいいんじゃないの。」と母が思っていて、それに対する暗黙の了解が兄弟の中にあっただ。

僕はいろんな趣味を持たせていただきました。尼崎のサッカー少年だったんですけど、スポーツ少年団で日独交流に参加して高2のとき1ヶ月ホームステイした時に、オーストリアまで足を伸ばして出会ったのが、ザルツブルグのあの話です。ここでドイツ語が好きになったわけです。ドイツ語の通訳やろうかな？そうかと思えば、叔父が亡くなった際に油絵の画材一式を残していったくれたので、唄家、

になるまで絵筆持ってました。画家になろうかな？とか。

また父親は落語以外のチケットをよく用意してくれて、歌舞伎・文楽・狂言などをよく見に行きましたよ。いろんなことを吸収したおかげで職業選択のときには迷いも多かったですね。

で、これ全部やるには唄家になればできるかなと思っただけですよ。甘い考えでしたね。なった当初は後悔の連続でしたね。話がうまいわけでもなかったし。でも、もう後戻りもできず、そのうちにふと父親のやってないことをやろうと思って新しい落語を始めてみたわけです。

■父親がやってないことをやろうと思って、いろんなジャンルに首を突っ込みましたが、実は若い頃は父親も相当いろんなことをやってきたんですよ。台本のないラジオDJをやったりとか。知識の量は、80歳を過ぎた今も敬服するものがあります。

■私はいま47歳ですが、ようやく落語もお客様に満足していただけるものを作れるようになりました。劣等感のかたまりだったものが少しずつ取れてきたように思います。普通の上方落語、古典落語をやってお客様に喜んでいただけるようにならないと、今回のように他の分野の方とわたりあうことはできません。そうしないと新しいことをやろうと思っても、



米朝師匠の愛称は「チャーチン」。だから僕は「チャーチン」です。これは「らくごべら」のサイン色紙(笑)。

陳腐なものになってしまいます。お互いが100パーセントでぶつかりあってこそ新たな100パーセントが生まれるというのが異業種交流の舞台の魅力です。

■落語の世界も昭和30~40年代の第一次ブームの後から、今は第二世代の隆盛の波がきているんじゃないかなと秘かに期待しています。一生懸命やりますのでよろしく願います。人生あつという間ですからね。一つ一つの舞台を大切にしていきたいです。

楽しみにしています。ありがとうございました。

サイン色紙をプレゼント!

3名の方に桂小米朝師匠の直筆サインをプレゼントいたします。サイン希望の方は、官製ハガキに、**会員番号/住所・氏名・電話番号・インタビューの感想などを記入の上、7月24日(月)までにピバーチェクラブ事務局「桂小米朝サインプレゼント係」**までお送りください。宛先は裏表紙下部をご覧ください。

TOPICS

NHK教育テレビ「知るを楽しむ〜私のこだわり人物伝〜」で7月にモーツァルトを語ります。ぜひ見てください。
放送予定日/7月の毎週火曜日 22:25~22:50

モーツァルト生誕250年上方落語的記念

桂 小米朝 らくごべら
「モーツァルト・モーツァルト」

2006. **9月8日(金)** 19:00 開演
中ホール

全席指定 / **好評発売中**
一般 3,500円 学生(当日指定) 2,000円